

ジェノサイドのファイル:ペコッツからパレスチナ人へ、「明白な使命」からガザ・リヴィエラへ

[アルフレッド・デ・ザヤス](#)

インターナショナルリスト 360 2025年2月13日

<https://libya360.wordpress.com/2025/02/13/genocide-files-from-pequots-to-palestinians-from-manifest-destiny-to-gaza-riviera/>

1964年、マーティン・ルーサー・キング博士は『なぜ待てないのか』という有名な本を著しました。奴隷制という犯罪と、アフリカ系アメリカ人が日々耐えてきた屈辱について述べたほか、数ページを割いて、16世紀から19世紀にかけてヨーロッパからの移住者と、それまでに南北アメリカ大陸に定住していた7000万人の先住民との間の「文明の衝突」状況を考察しています。コロンブスはアメリカ大陸を発見したわけではありません。何万年も前から他の人々がここに住んでいたのです。「アメリカ」として知られるようになった地域は「無主地」ではなく、実際には独自の文化と言語を持つ何百もの異なる先住民に属する地域であり、北米大陸の「最初の国家」でした。

アルゴンキン族、アパッチ族、カイユガ族、チェロキー族、シャイアン族、チッペワ族、コマンチ族、コヨーテ族、クリー族、ダコタ族、デラウェア族、ホピ族、アイオワ族、イロコイ族、ラコタ族、ミコシーク族、ミクマク族、モホーク族、モヒカン族、モハベ族、ムスコギー族、ナラガンセット族、オマハ族、オネダ族、ポーニー族、ペコット族、プエブロ族、ケチュア族、サギノー族、セミノール族、セネカ族、ショーニー族、ショショーニー族、スー族、スポケーン族、スクアミッシュ族、トリンギット族、ウナガン族、ユート族、ウィチタ族、ユロク族、ズニ族など約1000万人が、現在アメリカ合衆国とカナダが占める地域に暮らしていました。

キング牧師は次のように書いています。

「アメリカ先住民であるインディアンは劣った人種である」という教義を受け入れたとき、私たちの国は大量虐殺の中で誕生したのです。多数の黒人がアメリカ大陸に上陸する前から、人種差別の傷跡はすでに植民地社会を醜く歪めていました。16世紀以降、人種優越主義の戦いで血が流れました。おそらく、先住民を根絶やしにしようとした国家政策を持つ国は、アメリカだけでしょう。さらに、私たちはその悲劇的な経験を崇高な聖戦へと高めました。実際、今日でも、私たちはこの恥ずべき出来事を拒絶したり、後悔したりすることを許していません。私たちの文学、映画、ドラマ、民話は、すべてそれを称賛しています」[\[1\]](#)

実際、私が1960年代にシカゴで育ったときには、カウボーイとインディアンの闘いではカウボーイが善人で、インディアンが悪人であることは明らかでした。誰が抑圧者で誰が抑圧された人なのか、誰が泥棒で誰が殺人、略奪、屈辱の犠牲者なのかを理解するまでに、私には長い年月がかかりました。

私たちの考え方は変わったのでしょうか。「明白な使命」という哲学を拒絶する覚悟ができているのでしょうか。自己批判の能力を身につけ、南北アメリカの先住民に対して犯した罪の重大さに気づき始めたのでしょうか。キリスト教を実践し、他の民族に対して最低限の人間性を示すことができるのでしょうか。アメリカとは何を意味するのでしょうか。それは、世界の残りの地域に対する抑圧を意味するのでしょうか。トランプ氏がいう「アメリカを再び偉大に (Make America Great Again)」という言葉は何を意味しているのでしょうか。アメリカを、愛され、尊敬される国にする方が良いのではないのでしょうか。大統領執務室から発せられる行政命令を、米国のキリスト教の伝統に沿ったものにする方が、米国と世界にとってよいのではないのでしょうか。エレノア・ルーズベルトの遺産を復活させ、世界人権宣言の精神性を再発見することの方がよいのではないのでしょうか。

残念ながら、ドナルド・トランプ大統領の振る舞いを見ていると、世界が米国を「偉大」とみなすとは思えません。むしろ世界の文明人の大半は、米国を恐れ、憎むようになるでしょう。トランプ大統領は、カリギュラ効果（他者から強く禁止されるとかえって欲求が高まる心理現象）を実践しているようです。

つまり、恐れられている限り、嫌われ続けてもいいと考えているのです[2]。なぜアラスカのデナリ山をマッキンレー山に改名するのか。[3] なぜ現在進行中のイスラエルの民族浄化とガザ地区の人々[4]、パレスチナの人々に対するジェノサイドを支持するのか。[5] なぜパレスチナの人々の自決権、先祖が何千年も暮らしてきた故郷への権利を否定するのか。[6] ここでも役割が逆転しています。イスラエルが占領者であり、抑圧者であることは明らかです。パレスチナ人が犠牲者であり、1947年から48年の「ナクバ（大惨事）」以来、犠牲者であり続けていることも明らかです。ガザ地区での大量虐殺戦争は2023年10月7日に始まったのではなく、76年前に始まっていたのです。しかし、苦難に耐えてきたパレスチナの人々に正義をもたらそうとするどころか、トランプ大統領は彼らの土地を奪い、パレスチナ人を家から追い出して、地中海のリビエラを[7]イスラエルと米国の寡頭制者たちのために作るかのよように振る舞っています。アメリカの先住民族に対する大量虐殺は、すでに私たちのDNAに組み込まれてしまったのでしょうか。私たちはパレスチナにおける民族浄化と大量虐殺を熱狂的に支持しているのでしょうか。

「アメリカ大陸の発見」

毎年10月12日になると、米国では多くの人々がクリストファー・コロンブスの冒険を祝います。私たちは北米と南米の植民地化について、歴史の教科書で何を学んだのでしょうか。「歴史」という言葉から何を理解しているのでしょうか。ヘロドトスが指摘したように、歴史を書くということは「調査」を意味し、トゥキュディデスがさらに発展させ応用した仕事です。

さて、ヨーロッパ人は、開拓して発展させた空っぽの大陸にやって来たのでしょうか。それとも、私たちの祖先は、新しいフロンティアへの「移民」に近い存在だったのでしょうか。「大航海時代」のヨーロッパについて考えてみましょう。ヨーロッパ人の祖先は貧しく、都市は不潔で、過密状態、失業、病気、暴力が蔓延していました。16世紀、17世紀、18世紀、19世紀の移住者たち、すなわちスペイン人、ポルトガル人、イギリス人、フランス人、オランダ人、ドイツ人、ポーランド人、アイルランド人、そしてその他の「植民者」たちは、冒険家であり、一攫千金を狙う変わり者であり、それに続くのは新たな生活を夢見る庶民たちでした。歴史的事実として、今日私たちが北米（リオ・

グランデ川より北の西半球) と呼ぶ地域は、生態学的にバランスが取れた豊かな土地であり、1,000 万人ほどの人間がそれぞれの生活を営み、ヨーロッパ人にとって何ら脅威となる存在ではありませんでした。1492 年、クリストファー・コロンブスがインドへの西回りの航路を発見したと思い込み、バハマ諸島にあるグアナハニ島に上陸したときのことです。コロンブスはキューバとアンティル諸島に向かい、アメリカ大陸への 4 回の航海をおこないましたが、その間も住民を「インディアン」だと思い込んでいました。

先住民を「キリスト教化」し、安価な労働力として利用したスペイン人とは異なり、アングロサクソン人の祖先たちは先住民をほとんど利用せず、彼らを「悪魔」や「狼」と呼び、自分たちの優れた社会に同化させる価値はないと考えていました。マサチューセッツの清教徒は、魔女を火あぶりにしただけでなく、彼らに生き延びる術を教えた先住民「インディアン」をほぼ全滅させました。またボストン第一教会のジョン・コットン牧師や、ボストン第二教会のコットン・マザー牧師は、その試みを神の意志であると正当化しました。 *Deus vult.* (神の御心なら)

3 世紀の間に、北米先住民の人口の 98% が、「明白な使命」という公式政策に従って移住させられただけでなく、意図的に絶滅させられました。「自由の国、勇敢な者の故郷」の建国の父たち、ベンジャミン・フランクリン（「これらの野蛮人を根絶やしにするという摂理の計画」）、ジョージ・ワシントン（「猛獣」）、ジョン・アダムズ（「血に飢えた獵犬」）、トーマス・ジェファソン（「容赦ない野蛮なインディアン」）、ジェームズ・マディソン、ジェームズ・モンロー、アンドリュー・ジャクソン（「オオカミは巣穴で襲われる」）は、皆、アメリカ・インディアンの絶滅を求めました。ジェフリー・アマースト卿が、天然痘に感染した毛布を意図的に先住民に届けて、実際に細菌戦を仕掛けていたという決定的な証拠があります。[\[8\]](#) これらの恐ろしい歴史的事実は、もし誰かがそれらを調べようと思えば、公文書館に眠っています。しかし、ほとんどの歴史家や主流メディアは、「感謝祭」とポカホンタスの物語だけを記憶にとどめています。

メソアメリカおよび南アメリカとして知られる地域も、人口 6000 万人が密集する豊かな土地であり、アステカ王国の首都テノチティラン（現在のメキシ

コシティ)のような壮大な都市や、町、村、印象的な建築物、水道橋、スポーツ施設、科学、天文学、芸術、そしてアボカド(アステカ語で「アオアカテコ」は、オアハカ近郊のテワカン溪谷が原産)、豆、ブルーベリー、カカオ、カシューナッツ、キャッサバ、カイエンペッパー、唐辛子、クランベリー(原産地はカナダのアルバータ州エドモントン近郊)、ひょうたん、ハラペーニョ、トウモロコシ(アラワク語で「マイース」、一般的に「コーン」として知られている)、メープルシュガーとメープルシロップ(カナダ北東部のオジブウェ族とアルゴンキン族が生産)、パッションフルーツ、ピーナッツ、ペカン、パイナップル、キニーネ(強壯剤!）、ヒマワリ(ヘリアンサス)、甘ピーマン、ジャガイモ(インカ語でパパまたはパタタ)、カボチャ、タピオカ、トマト(ナワトル語でトマトウル)、トピナンプル、バニラ、「ワイルドドライス」(アメリカ中央北部の先住民であるアニシナベ族が手で収穫したものの)、ズッキーニなどです。非常にまずいものもヨーロッパに持ち込まれました。タバコ(ドミニカ共和国の修道士、後に司教となったバルトロメ・デ・ラス・カサスが言及したアラワク族またはタイノ族の言葉に由来する)は、1558年にスペインに持ち込まれるまでヨーロッパではそれまで知られていませんでした。

ラス・カサスの著作を読むと、スペイン人の祖先たちは先住民に残忍な攻撃を加え、何百万人もの男性を殺害し、奴隷にし、女性をレイプし、最終的には生き残った人々と混血して、今日ラテンアメリカで知られている「混血」社会を作り上げたことが分かります。メキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、コロンビア、ベネズエラ、エクアドル、ペルー、ボリビアを旅すると、アステカ族、マヤ族、インカ族の子孫を目にすることができます。ペルーのトルヒーヨ元大統領、ベネズエラのチャベス元大統領、ボリビアのモラレス元大統領はスペイン語の姓を持っていますが、先住民の祖先も同様に数多くいることは確かです。アメリカ大陸の発見と、「無主地先占」の法理論については、これくらいにしておきましょう。

アメリカ大陸の先住民たちは、排外主義とは無縁であったことを覚えておく価値があります。コロンブス自身も著述の中で認めているように、クリストバル・コロンはアメリカ大陸の先住民たちから素晴らしいもてなしを受けました。しかし、ヨーロッパからの新参者たちは、剣を手にした移住者でした。ス

ペインによる植民地化について唯一良いと言えるのは、修道士アントニオ・デ・モンテシーノス（「彼らも人間ではないのか」）とバルトロメ・デ・ラス・カサスが神聖ローマ皇帝カール5世に先立って行った人権活動が、先住民の人権を認め、彼らへの虐待や奴隷化を禁じた1542年の「新法」の採択につながったことくらいでしょう[\[9\]](#)。

1550年から1551年にかけてのバリャドリッドにおける大論争[\[10\]](#)は、人権概念の発展における画期的な出来事として歴史に名を残しています。確かに、チャールズの法律は平然と破られていましたが、これは規範とそれが強制されることとは別物であるという当然の事実を示しているに過ぎません。しかし、もし規範がなければ、私たちは「強者が正義」という名の弱肉強食の掟に完全に支配されていたでしょう。

ヨーロッパ人がアメリカ大陸を「発見」する代わりに、イロコイ族、クリー族、ダコタ族、アステカ族、インカ族が海を渡ってヨーロッパを「発見」していたら、世界はどうなっていたのだろうかと考えてしまいます。彼らは、私たちの祖先が虐殺したように、ヨーロッパ人を虐殺していたでしょうか。

アメリカ大陸の先住民名が私たちに伝えるもの

アフリカ系アメリカ人に対する差別や屈辱を非難することが「政治的に正しい」とされるようになった今、歴史家やメディアは、ついにアメリカ大陸の先住民族に対する差別、排除、侵略に目を向けるのでしょうか。先住民に対する犯罪行為、1864年のララミー条約を含め、何百もの破棄された条約を、主流メディアはいつ認めるのでしょうか。ララミー条約では、サウスダコタ州のブラックヒルズがスー族の永遠の所有地であると認められていましたが、金が発見されるや否や破棄されました。そこでは、ウーンデッド・ニーの虐殺も起こりました。また、ラシュモア山の聖なる丘には、4人の歴代アメリカ大統領の頭部が彫刻されていますが、そのうち2人は奴隷所有者であり、4人とも「インディアン」嫌いだった。[\[11\]](#)

アフリカ系アメリカ人に対する根深い人種差別、奴隷制や隔離政策、KKK団やその他の人々による黒人へのリンチは、犯罪であることに誰もが同意します。しかし、北米の先住民族に対する4世紀にわたる虐殺や搾取は、一般の人々の

怒りを引き起こすこともなく、関心すらも持たれていません。残念ながら、16世紀から20世紀にかけての文明の衝突は、ヨーロッパからの移住者たちが南北アメリカ大陸の先住民7000万人の生活基盤を破壊した時代であり、それは現在も続いています。それにもかかわらず、彼らに対して行われた物理的・文化的な大量虐殺は、依然としてタブー視されたままです。

アメリカ連合軍（南軍）将校の記念碑を撤去しようとするのであれば、アンドリュー・ジャクソン大統領やウィリアム・シャーマン将軍、そして「いいインディアンは死んだインディアンだけだ」という言葉を残したフィリップ・シェリダン将軍など、先住民を殺害した人物の銅像も撤去するのでしょうか。

ここで立ち止まって、先住民の地名が私たちに何を語りかけているのかを考えてみましょう。 アディロンダック、アラバマ、アラスカ、アルゴンキン、アレゲニー、アパッチ、アパラチー、アパラチア、アパラチア、アポマトックス、アーカンソー、ピロクシ、カルメット、カルーサ、カナダ、カリブー、カイユーガ、チャタヌーガ、シャトークア、チェパノック、チェロキー、チェサピーク、シャイアン、シカゴ、チカソー、チリワック、チヌーク、チポラ、チペワ、チワワ、チョクトー、クラトソップ、コロマ、コルサ、コマンチ、コマック、コネチカット、コキットラム、クリー族、Curyung、Cuyahoga、ダコタ族、デラウェア族、デナリ、デトロイト、エリー、ハッケンサック、ハワイ、ハイアリア、ヒアワタ、ホピ族、ヒューロン族、アイダホ、イリノイ、イノーラ、イノイ、アイオワ、イロコイ族、カラマズー、カナブ、カンザス、ケベック、ケノーシャ、ケンタッキー、ケウィナウ、クロンダイク、クスコクウィム、リルエット、マッキナック、マキナオ、マリブ、マリセット、マナデー、マンハッタン、マニトバ、マントウ、マッタワ、マサチューセッツ、メラメック、メリック、メリマク、メトアック、マイアミ、ミコスキ、ミシガン、ミシピキュテン、ミクマック、ミルウォーキー、ミネソタ、ミネワンカ、ミシシッピ、ミズーリ、モアブ、モカシン、モドック、モホーク、モヒカン、モハベ、モナチェ、モントーク、ムスコギー、マスキーガン、マスキーゴン、マスコーカ、マスコー、ナコタ、ナナイモ、ナンタケット、ナパ、ナラガンセット、ナチエズ、ナガタック、ナバホ、ネブラスカ、ナイアガラ、ノーウオーク、オカラ、オハイオ、オカナガン、オキーチョビー、オクラホマ、オマハ、オマク、オネダガ、オンタリオ、オレゴン、オロノ、オセージ、オセー

ゴ、オタワ、パルース、パムリコ、パノラ、パタハ、パウニー、ペナクック、ペナマカン、ペンサコーラ、ペント、ピオガ、ピオリア、ピオトーン、ペコット、ポカホンタス、ポコノス、ポンティアック、ポトマック、ポトシ、ポキプシー、ケベック、ラッパハノック、ロアノーク、サラソタ、サワッチー、シツワテ、タコニック、タホ、タコマ、タラハシー、タンパ、テクムセ、テネシー、テックスカーナ、テキサス、ティチガン、ティコンデローガ、ティペカヌー、トマホーク、トパウイング、トピカ、トロント、ツーソン、タルサ、チューニカ、タスカルーサ、タスカローラ、タスキギー、トゥヤ、ユタ、ユート、ワバムン、ワバスカ、ワバシュ、ウェイコ、ワダナ、ワラワラ、ワロワ、ワナキット、ワンチェス、ワノック、ワポタ、ワスコ、ワタウガ、ワトンガ、ワウパカ、ワウサウ、ウェナッチー、ウェノナ、ウィチタ、ウィラメット、ウィネベゴ、ウィニマック、ウィニペグ、ウイノナ、ウイスコンシン、ワイオミング、ヤクタット、ヤズー、ヨセミテ、ユバ、ユーコン、ユマ …

これらの響きの良い名前は、いったいどの言語で話されているのでしょうか。また、私たちにどのようなメッセージを伝えているのでしょうか。先住民の名前は、アメリカ大陸の豊かな土地で生活し繁栄したファースト・ネーション（先住民族）の名残です。人類学者の推定によると、ヨーロッパ人によって彼らの土地が「発見」された当時、北米にはおよそ1,000万人の人々が暮らしていたと言われています。この広大な大陸は彼らのものであり、そこには村やウィグワム（家屋）、ティピー、笑い声、そして生命であふれていました。それでは、彼らは今どこにいるのでしょうか。彼らはどこへ行ってしまったのでしょうか。風や雲とともに去り、忘れ去られてしまったのです。

チャプルテペック、チチェン・イツツア、キューバ、マチュピチュ、ティカル、ウシュアイアは私たちに何を語りかけているのでしょうか。リオ・グランデの南の大陸には、おそらく6000万人もの人間が住んでいたのです。彼らの土地は無主地ではありませんでした。私たちは、今でもアステカ、マヤ、インカ、ケチュアが存在を中南米の人口から認識することができます。ドミニコ会の修道士バルトロメ・デ・ラス・カサスとアントニオ・デ・モンテシーノスの著作から、アラワク族、シボネイ族、タイノ族が虐殺され、奴隷にされたことを私たちは知っています。ヨーロッパの植民地主義者によって、どれだけの先

住民の命が意図的に絶たれたのでしょうか。病気や飢餓によって命を落としたのは何人だったのでしょうか。1000万人？ 2000万人？

ラテンアメリカにおける「キリスト教化」とアングロサクソンによる「明白な使命」政策は、人類の長い歴史の中で最大の人口動態的惨事であったかもしれません。

21世紀には、これらの名誉ある民族と、彼らが何千年にもわたって自然を理解し、自然を大切にしてきたことが再び注目されるようになるかもしれません。

アラスカはアリュート語で「偉大な土地」を意味する

アレゲニーはレナペ語で「美しい流れ」を意味する

アパラチー族は、ムスコギアン語で「川の向こう側」を意味する

チェサピーク族は、アルゴンキン語で「大きな貝の湾」を意味する

シカゴ族は、アルゴンキン語で「野生のタマネギの場所」を意味する

キューバ族は、アロワカン語で「肥沃な土地」を意味する

イリノイ族は、アルゴンキン語で「普通の話し手」を意味する

アイオワ族は、アルゴンキン語で「眠っている者たち」を意味する

カンザス族は、スー語で「南風」を意味する

ケンタッキーはショーニー語で「草原」を意味する

マンハッタンはレナペ語で「島」を意味する

マサチューセッツはアルゴンキン語で「大きな丘のある場所」を意味する

ミシシッピはアルゴンキン語で「大きな川」を意味する

ミズーリはアルゴンキン語で「大きなカヌーの民」を意味する

ネブラスカはスー語で「平らな川」を意味する

ナイアガラはイロコイ語で「雷鳴の水」を意味する

オハイオ州はイロコイ語で「良い川」を意味する

オンタリオ州はイロコイ語で「美しい湖」を意味する

オタワはアルゴンキン語で「交易の中心地」を意味する

ペンサコーラはムスコギ語で「髪の毛の人々」を意味する

ポトマックはアルゴンキン語で「もたらされたもの」を意味する

ケベックはミクマク語で「海峡」または「狭い水路」を意味する

トロントはヒューロン語で「集会所」を意味する

ウシュアイアは、ヤーガン語で「深い湾」を意味する。

ワロワは、サハプティン語で「歌う水」を意味する。

ウィニペグは、アルゴンキン語で「汚れた水」を意味する。

ワイオミングは、アルゴンキン語で「大平原で」を意味する

奴隷制度やアフリカ系アメリカ人に対する抑圧の恐ろしさに対する新たな認識が、私たちが「インディアン」と呼ぶ先住民に対する大虐殺に目を向けるきっかけとなるかもしれません。また、南北アメリカの先住民の天然資源の略奪に立ち向かうよう私たちを駆り立て、彼らに対して行われた重大な不正を認め、適切な賠償と持続可能な社会復帰を確保する方法を検討するよう促すでしょう。

結論から言えば、ヨーロッパによるアメリカ大陸の植民地化は決して終わりませんでした。アフリカやアジアのような脱植民地化プロセスはありませんでした。

た。今日に至るまで、北米の先住民は植民地支配の形態で生活を続けています。アフリカやアジアの人々とは異なり、米国、カナダ、中米、南米の原住民は、独立と繁栄を取り戻すことはありませんでした。その理由の一部は、先住民が物理的な大量虐殺の犠牲者となったこと、また、実際には招かれざる移住者であったヨーロッパからの入植者があまりにも増えすぎたため、先住民が自分たちの土地でありながらマイノリティとなり、その名残りが川や山、湖、都市や村の名前にしか残っていないことになってしまったのです。

マーティン・ルーサー・キング牧師は、アメリカ先住民の悲劇に人々の目をむけようとしていました。彼はそれを大量虐殺と呼びました。言葉を和らげようとはしませんでした。キング牧師の言葉は耳に痛いものですが、残念ながら誇張ではありません。キング牧師が残したこの側面がメディアによって組織的に無視され、高校や大学で教えられていない理由なのかもしれません。いつの日か、先住民の権利を訴えたキング牧師の功績が正当に評価されることを心から願わずにいません。

キング牧師が告発文を書いた60年後も、アメリカ先住民に対する組織的な人種差別は続いています。そして、多くの人々は、かつてサウスダコタの店舗に掲げられていた看板、アリゾナのナバホ居留地近くやアメリカ西部の多くの場所に掲げられていた看板を忘れていません。「犬とインディアン立ち入り禁止」[\[12\]](#)。このような屈辱は忘れがたいものです。

政治家たちが耳を傾け、南北アメリカの先住民に対する犯罪の重大性を認識し、生存者の社会復帰に努め、少なくとも国連の先住民の権利に関する宣言で表明された権利を彼らに与えることを期待しましょう。[\[13\]](#)

アメリカの「インディアン」とパレスチナ人

アメリカ大陸の先住民族に対するジェノサイドは孤立したものではありません。その後も多くのジェノサイドが続いています。今日、私たちはガザ地区でそれを目の当たりにしており、トランプ大統領がパレスチナ人を追放し、ガザ地区を富裕層向けの不動産パラダイスに変えようという恥知らずな提案をしていることに憤りを感じています。その冷笑さは比類がないものです。

国際司法裁判所は、イスラエルとパレスチナに関する2つの勧告的意見を出しています。2004年7月9日の「壁に関する勧告的意見」[\[14\]](#)、および2024年7月19日の「占領パレスチナ地域におけるイスラエルの政策と慣行から生じる法的影響に関する勧告的意見」[\[15\]](#)で、後者の中で裁判所は次のように述べています。

「イスラエルが占領パレスチナ地域に継続して存在することは違法である」

「イスラエルは占領パレスチナ地域における違法な存在をできる限り迅速に終結させる義務がある」

「イスラエルはすべての新たな入植活動を直ちに停止し、占領パレスチナ地域からすべての入植者を退去させる義務がある」

「イスラエルは、被占領パレスチナ地域におけるすべての自然人または法人に与えた損害を賠償する義務がある」

「すべての国家は、イスラエルの被占領パレスチナ地域における不法占拠から生じる状況を合法とは認めず、またイスラエルの被占領パレスチナ地域における継続的な占拠によって生じた状況を維持するための支援や援助を行わない義務がある」

「国際連合を含む国際組織は、イスラエルの占領下パレスチナ地域における不法占拠から生じる状況を合法と認めない義務を負っている」

「国際連合、特にこの意見を要請した総会、および安全保障理事会は、イスラエルの占領下パレスチナ地域における不法占拠をできる限り迅速に終結させるために必要な正確な方法およびさらなる行動を検討すべきである」

米国市民として、私は米国大統領がこの勧告的意見に従い、ジェノサイド国家への軍事的、政治的、経済的、外交的、宣伝的支援を停止することを期待しています。米国市民として、私たちは皆立ち上がり、「私たちの名においてではない！」と声を上げるべきです。もし私たちが抗議しなければ、私たちはジェノサイドに加担していることとなります。

ICJで審理中の係争案件、南アフリカ対イスラエル[16]には、ベリーズ、ボリビア、チリ、コロンビア、アイルランド、リビア、モルディブ、メキシコ、ニカラグア、パレスチナ、スペイン、トルコが参加していますが、これはおそらくICJがこれまでに扱った中で最も重要な案件でしょう。私たちは文明人であるか、そうでないかです。ICJと国連自体の権威と信頼性が問われています。

南アフリカの申し立てを読み、イスラエルの回答と比較した人なら誰でも、ジェノサイドの罪が疑いの余地なく証明されていることが分かるでしょう。ICJには、イスラエルがジェノサイドを犯したことを確認し、「意図」の問題が確立されたことを示す判決を下す以外に選択肢はありません。これは、ナクバの[17]継続であり、シオニストの夢の継続です。シオニストは、イスラエル人のために全領土を獲得し、先住民であるパレスチナ人を、まるで人間ではないかのように、重要ではないかのように、権利がないかのように、追い出そうとしています。聞き覚えがあるでしょう。アメリカの先住民も同様に扱われたのです。追い返され、絶滅させられ、略奪され、忘れ去られたのです。

2024年11月21日、国際刑事裁判所は、ローマ規程第7条に定められた人道に対する罪への責任を理由に、ベンヤミン・ネタニヤフ[18]と元国防大臣のヨアブ・ガラントに対して逮捕状を出しました。それにたいしてトランプ大統領は何をしたのか。ICCに制裁を課し[19]、ホワイトハウスでネタニヤフを堂々と迎え入れたのです[20]。私たちの目の前で、国際法と道徳に対する公然たる反逆がおこなわれたのです。トランプもネタニヤフも、その罪に問われるべきであり、両者とも文明社会から孤立させられるべきです。しかしそのためには、私たちには異なるメディアの語り口が必要です。主流メディアから日常的に流されるフェイクニュース、フェイクヒストリー、フェイク法、フェイク外交から目を背けなければなりません。私たちは、政府に倫理を要求しなければなりません。

キング牧師が著書『なぜ待てないのか』で書いたように、私たちの祖先はアメリカ大陸の先住民に対して大量虐殺を行いました。今日、アメリカはイスラエルによるパレスチナ人に対する大量虐殺に加担しています。ドナルド・トランプだけでなく、ビル・クリントン、ジョージ・W・ブッシュ、バラク・オバ

マ、そしてジョー・バイデンもそうです。大量虐殺のウイルスは本当に私たちの DNA に入り込んでしまったのでしょうか。

参考文献

バルトロメ・デ・ラス・カサス著『インディアス荒廃史』ジョンズ・ホプキンス大学出版、1992年；

ダニエル・カストロ著『帝国のもう一つの顔：バルトロメ・デ・ラス・カサス、先住民の権利、教会の帝国主義』デューク大学出版、ノースカロライナ州ダーラム、2007年。

デビッド・スタンナード著『アメリカン・ホロコースト』オックスフォード大学出版、1992年。

リチャード・ドリンノン著『Facing West』（オクラホマ大学出版、1997年）、フレデリック・ホクシー編『Encyclopedia of North American Indians』（特に「人口：接触前～現在」の項目、ラッセル・ソントン著、500～502ページ）。

カール・ウォルドマン著『Atlas of the North American Indian』（ニューヨーク、1985年）。

フランシス・ジェニングス著『The Invasion of America』（チャペルヒル、1975年）

ニコラス・ガイアット著『Providence and the Invention of the United States』（ケンブリッジ、2007年）

R. W. ヴァン・アルスタイン著『The Rising American Empire』（オックスフォード、2010年）

レジナルド・ホースマン著『Expansion and American Indian Policy 1883-1812』（ミシガン州立大学出版、1967年）

ノーム・チョムスキー著『希望と展望』ペンギン社、2010年、16-24ページ。

ウォード・チャーチル著『土地を巡る闘い：北米先住民による大量虐殺、生態系破壊、植民地化への抵抗』サンフランシスコ、シティライツブックス、2002年。

タマラ・スターブランケット著『子供たちに苦しみを与えないで』クラリティプレス、アトランタ、2019年。

マーティン・ルーサー・キング、なぜ待てないのか（1964年）、ニューヨーク：ニュー・アメリカン・ライブラリー（Harper & Row）。[ISBN 0451527534](#)、118-9ページ。

イラン・パッペ、『イスラエルのプロパガンダ』、Investig'Action、2016年。イラン・パッペ、『パレスチナの民族浄化』、One World Publications、2006年。

注

[1] なぜ待てないのか、141ページ、また、以前の版（ニュー・アメリカン・ライブラリー、シグネット・ブック、ニューヨーク、120ページ）も参照。
<https://www.peoplesworld.org/article/dr-king-spoke-out-against-the-genocide-of-native-americans/>

[2] スエトニウス著、
<https://www.poetryintranslation.com/PITBR/Latin/Suetonius4.php>

[3] <https://apnews.com/article/trump-denali-mount-mckinley-alaska-2fbff88e1845e066a65cbabfa17284ae>

[4] ノーマン・フィンケルシュタイン著『ガザ』カリフォルニア大学出版局、オークランド、2018年。

[5] <https://www.counterpunch.org/2024/05/17/a-rebellion-against-law-and-civilization-genocide-and-its-accomplices/>

筆者のアルフレッド・デ・ザヤス氏は、法学博士・ジュネーブ外交学院
哲学博士教授、

【翻訳チェック 田中靖宏】